

# ノーベル賞の国際政治学 ノーベル文学賞と日本、 西脇順三郎をめぐる推薦と選考 1958 ~ 1968年

著者	吉武 信彦
雑誌名	地域政策研究
巻	24
号	4
ページ	1-23
発行年	2022-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.20635/00001246">http://doi.org/10.20635/00001246</a>

# ノーベル賞の国際政治学

## —ノーベル文学賞と日本、西脇順三郎を めぐる推薦と選考 1958～1968年—

吉 武 信 彦

### International Politics of the Nobel Prize: The Nobel Prize in Literature and Japan, the Nomination and Selection of Junzaburo Nishiwaki 1958-1968

YOSHITAKE Nobuhiko

#### 要 旨

本稿は、ノーベル文学賞に推薦されていた日本人候補者、西脇順三郎に焦点を当て、その推薦と選考の状況を考察する。西脇は日本の代表的な詩人の一人であり、1958年から1968年までの間に10回、同賞に推薦されていた。誰がいかなる理由により西脇をノーベル文学賞に推薦していたのであろうか。また、ノーベル文学賞を選考するスウェーデン・アカデミーにおける西脇の評価はいかなるものであったのであろうか。

1968年に川端康成が日本人として初めてノーベル文学賞を受賞する。この川端の受賞を考察するためには、川端のみに注目するのではなく、1958年以降の約10年間における他の日本人候補者をめぐる選考にも注目する必要がある。スウェーデン・アカデミーが日本人作家を本格的に取り上げ始めたとき、西脇の作品はスウェーデン側にいかに映っていたのであろうか。

キーワード：西脇順三郎、エズラ・パウンド、ノーベル文学賞、スウェーデン・アカデミー

#### Summary

This paper looks at the nomination and selection of Junzaburo Nishiwaki, a Japanese candidate for the Nobel Prize in Literature. Nishiwaki was one of the leading poets in Japan and he was nominated ten times during the period from 1958 to 1968. The author wonders who and

for what reason nominated Nishiwaki a candidate for the Nobel Prize in Literature, and how he was evaluated by the Swedish Academy responsible for choosing the Nobel Laureates in Literature.

Yasunari Kawabata became the first Japanese Nobel Laureate in Literature in 1968. To examine this awarding, we should note the selections of not only Kawabata but also other Japanese candidates in about ten years since 1958. How did the Swedish Academy view Nishiwaki's works when they started adopting a serious stance on nomination of Japanese writers?

Keywords: Junzaburo Nishiwaki, Ezra Pound, the Nobel Prize in Literature, the Swedish Academy

はじめに

1 西脇順三郎の推薦状況

- (1) 全般的状況
- (2) 1958年
- (3) 1960年
- (4) 1962年
- (5) 1963年
- (6) 1964年
- (7) 1965年
- (8) 1966年

2 西脇順三郎に対するスウェーデン・アカデミーの評価

- (1) スウェーデン・アカデミー内の選考
- (2) 1958年
- (3) 1960年
- (4) 1961年
- (5) 1962年
- (6) 1963年
- (7) 1964年
- (8) 1965年
- (9) 1966年
- (10) 1967年
- (11) 1968年

おわりに

## はじめに

本稿は、川端康成がノーベル文学賞を受賞する1968年までの時期に同賞に推薦されていた日本人候補者、西脇順三郎（詩人、1894-1982年）に焦点を当て、その推薦と選考の状況を考察するものである。

1968年、川端がノーベル文学賞の日本人初の受賞者となった。これは他の日本人候補者との比較の中で最終的に決まったものであった。表1のように、1958年以来、川端以外に谷崎潤一郎、西脇順三郎、三島由紀夫が推薦されていた。同賞の選考母体であるスウェーデン・アカデミーがいかなる判断の下に川端を選出したのかを考えるためには、他の日本人候補者に対する評価も同時に検討する必要がある。

この問題意識に立ち、筆者は、まず谷崎潤一郎に関する推薦と選考の状況を考察した<sup>1)</sup>。谷崎は、死去した1965年までに、1958年、1960年から1965年までの各年の計7回ノーベル文学賞に推薦されていた。1960年代前半にはスウェーデン・アカデミーでは谷崎を筆頭に日本人候補者の分析がなされていた。谷崎は1960年、1964年の選考において最終候補者になることはあったものの、結局は受賞には至らなかった。それは、表2の1968年までの選考状況にある通りである。なお、表1、表2は、谷崎の推薦、選考を分析した際に作成したものであるが、西脇の説明にも有用であるため本稿に再録した。

それでは、1968年までの西脇の推薦状況はいかなるものであったのであろうか。西脇は、表1のように1958年、1960年から1968年までの各年、計10回推薦されていた。同時期に、上記

表1 ノーベル文学賞日本人候補者の推薦状況（1958～1968年）

選考年	日本人候補者 注			
1958	谷崎潤一郎	西脇順三郎	—	—
1959	—	—	—	—
1960	谷崎潤一郎	西脇順三郎	—	—
1961	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	—
1962	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	—
1963	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1964	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1965	谷崎潤一郎	西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1966		西脇順三郎	川端康成	—
1967		西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫
1968		西脇順三郎	川端康成	三島由紀夫

注 「—」は推薦なし。空欄は死去に伴い、ノーベル賞受賞資格がないことを示す。

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース <<https://nobelprize.org/nomination/archive/>> およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

表2 ノーベル文学賞日本人候補者の選考状況 (1958～1968年)

選考年	日本人候補者	候補者総数	ノーベル委員会ショート・リスト候補者の選出状況 註	受賞者 (出身国)
1958	谷崎潤一郎	41	無	Boris Pasternak (ソ連) 辞退
	西脇順三郎		無	
1959	無	55	無	Salvatore Quasimodo (イタリア)
1960	谷崎潤一郎	58	6名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	Saint-John Perse (フランス)
	西脇順三郎		無	
1961	谷崎潤一郎	56	無	Ivo Andrić (ユーゴスラヴィア)
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
1962	谷崎潤一郎	66	無	John Steinbeck (アメリカ)
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
1963	谷崎潤一郎	80	無	Giorgos Seferis (ギリシャ)
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		6名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	
1964	谷崎潤一郎	76	6名に残るが、委員長案最終候補者2名には入らず	Jean-Paul Sartre (フランス) 辞退
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		無	
1965	谷崎潤一郎	90	無	Michail Solochov (ソ連)
	西脇順三郎		無	
	川端康成		無	
	三島由紀夫		無	
1966	西脇順三郎	72	無	S. J. Agnon (イスラエル)、Nelly Sachs (スウェーデン)
	川端康成		6名に残り、委員長案最終候補者5名の第1位となる	
1967	西脇順三郎	70	無	Miguel Angel Asturias (グアテマラ)
	川端康成		7名に残り、委員長案最終候補者3名の第2位となる	
	三島由紀夫		7名に残るが、委員長案最終候補者3名には入らず	
1968	西脇順三郎	83	無	川端康成 (日本)
	川端康成		4名に残り、委員長案最終候補者3名の第3位となる	
	三島由紀夫		無	

註 ショートリストとは、スウェーデン・アカデミーのノーベル委員会が関心をもち、絞り込んだ候補者リストとする。ここでは最終候補者を取り上げた。ノーベル委員会は委員長報告の形で最終的にそのうち数名に順位をつけてアカデミー会員に提案する。委員間で順位付けが割れた際は、委員長案のほかにも他の委員案も併記される。

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース <<https://nobelprize.org/nomination/archive/>>およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

の谷崎に加えて、三島も1963年、1964年、1965年、1967年、1968年の計5回推薦されていた。また、川端は1961年から1968年までの各年、計8回推薦されていた。以上のように、川端が受賞する1968年まで日本人初の受賞者の座をめぐる日本人候補者が競い合っていた。川端だけが唯一の日本人候補者であったわけではなかったのである。

西脇がノーベル文学賞に推薦されていたことは、西脇の存命中の当時から関係者の間では知られていた。西脇の周辺にいた人物が推薦に深くかかわっていたことがその理由と考えられる。西脇本人も、ノーベル賞に推薦されていたが、取れずに終わったことを残念に思う気持ちがあったといわれる。たとえば、西脇に関して関係者の思い出話を集め、西脇死去の2年後に出版された『回想の西脇順三郎』にはノーベル文学賞への言及もある(執筆者の肩書は当時のもの)。「先生がノーベル文学賞を受けられずに逝かれたことは痛恨のきわみである」(阿部良雄・東京大学助教授)<sup>2)</sup>、「ノーベル賞の候補に挙げられたときも、『スウェーデンなんていうのはヨーロッパの田舎ですよ』と先生は言われた」(海保眞夫・慶應義塾大学教授)<sup>3)</sup>、「同年[1957年—筆者、以下同様]には国際的な詩人エズラ・パウンドが手紙を寄こして激賞し、ノーベル賞の候補に推されることになったが、海外での翻訳が少なく、知名度が乏しいため惜しくも受賞しなかった」(新倉俊一・明治学院大学教授)<sup>4)</sup>。また、西脇の評伝を書いた作家の工藤美代子は、1976年に西脇に面会したときに、運動費が足らずノーベル文学賞を取れなかったという趣旨の説明を本人から受けたことを紹介している<sup>5)</sup>。

推薦、選考などの文書は、ノーベル財団の規程で50年間の守秘義務があり、公開されない。それは推薦者などにも適用され、推薦した事実も公表できない。しかし、実際には50年を待たずに推薦の「事実」が独り歩きをすることも多い。それは、西脇の例を見てもよくわかる。1957年に詩人、エズラ・パウンド<sup>6)</sup>からの助言を得て、西脇がノーベル文学賞に推薦された経緯については、後述する。

その西脇の推薦に関する正式な記録は、推薦から50年を経た2008年以降に選考母体のスウェーデン・アカデミーによって公開されている。日本人候補者の選考状況は日本でも新聞等を通じて報道されているが<sup>7)</sup>、選考に関する詳細な分析は極めて限られている。たとえば、1963年までの日本人候補者の選考に関して、スウェーデン在住の日本人、大木ひさよがスウェーデン・アカデミーの文書に基づいて紹介を行い、西脇についても若干触れている<sup>8)</sup>。しかし、西脇の推薦に焦点を当て、1968年までの選考を掘り下げた研究はないのが現状である。

本稿は、1968年までの西脇をめぐる推薦と選考の状況をスウェーデン・アカデミーの開示史料を中心に考察する。西脇を誰がいかなる理由によりノーベル文学賞に推薦していたのであろうか。また、ノーベル文学賞の選考を行うスウェーデン・アカデミーにおいて西脇はいかなる評価を受けたのであろうか。

## 1 西脇順三郎の推薦状況

### (1) 全般的状況

表1、表2に見られるように、西脇は1958年に推薦され始め、その後1960年から1968年まで毎年推薦されていた。推薦回数は、計10回であり、この時期、最も多く推薦された日本人であった。しかし、谷崎、三島、川端とは異なり、スウェーデン・アカデミーにおける選考で最終候補者に選出されることはなかった。こうした違いが選考過程において生じた背景については、第2章で考察する。

西脇の推薦者は表3の通りである。現時点でスウェーデン・アカデミーの開示した史料によれば、1958年、1960年、1962年から1968年までの各年については、東京大学教授の辻直四郎<sup>9)</sup>から推薦状が出されており、1967年、1968年を除き、その原本もスウェーデン・アカデミーで確認できた。1967年、1968年の推薦状は、現時点で所在が不明である。

なお、1961年については、スウェーデン・アカデミーの候補者リストによれば、「日本作家協

表3 ノーベル文学賞日本人候補者、西脇順三郎の推薦者一覧（1958～1968年）

選考年	日本人候補者	推薦者	職業・肩書 註	推薦状日付・差出地
1958	西脇順三郎	辻直四郎	東京大学教授、日本学士院会員	1957年10月5日、11日付・東京
1959	無	無	無	無
1960	西脇順三郎	辻直四郎	東京大学教授、日本学士院会員、パリ・アジア協会名誉会員	1959年9月18日付・東京
1961		日本作家協会		不明
1962		辻直四郎	日本学士院会員、東京大学名誉教授、東アジア文化研究センター所長	1962年1月17日付・東京
1963		辻直四郎	日本学士院事務局長、東アジア文化研究センター所長、東京大学名誉教授	1962年12月20日付・東京
1964		辻直四郎	日本学士院事務局長、東アジア文化研究センター所長、東京大学名誉教授	1963年12月16日付・東京
1965		辻直四郎	東京大学名誉教授、日本学士院事務局長	1965年1月20日付・東京
1966		辻直四郎	東京大学名誉教授、日本学士院事務局長	1966年1月11日付・東京
1967		辻直四郎	不明	不明
1968		辻直四郎	不明	不明

註 職業・肩書は、基本的に推薦状に使われたものを載せた。

出所 ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://nobelprize.org/nomination/archive/>>およびスウェーデン・アカデミー史料に基づき、筆者作成。

会」(The Japanese Authors' Union) が推薦したことになる<sup>10)</sup>。この推薦状の原本も、スウェーデン・アカデミーで不明であり、筆者は確認できていない。そのため、「日本作家協会」が日本のどの団体を指すのか、断定することは現時点で困難である<sup>11)</sup>。また、1963年の推薦については、日本学士院(The Japanese Academy) が推薦したと、ノーベル財団のノミネーション・データベースは発表している<sup>12)</sup>。これに関しては、辻による推薦状がスウェーデン・アカデミーで確認できる。日本学士院事務局長の辻が日本学士院のレターヘッドの付いた便箋で推薦状を出したため、日本学士院という組織の推薦と間違われて記録されたと考えられる。

以上の推薦状況をまとめると、西脇への推薦状のうち、原本から内容を考察できるものは、1958年、1960年、1962年から1966年までの各年の計7回分となる。1961年、1967年、1968年の3回分は不明である。

なお、確認できた上記の推薦状は、発出後、直近の選考への推薦としてスウェーデン・アカデミーにより受理され、審査対象となっている。

## (2) 1958年

それでは個々の推薦状について、時系列に沿ってその詳細を見てみよう。

最初の推薦状は、東京大学文学部教授、辻直四郎が1957年10月5日付けでスウェーデン・アカデミー、ノーベル賞委員会宛に出している<sup>13)</sup>。辻の署名下にある肩書は「東京大学サンスクリット文学・言語学教授、日本学士院会員」と明記されている。また、住所として「日本国東京都文京区 東京大学文学部」が記されている。

「推薦状」とのタイトルがつけられた本文は、2段落からなる短いものである。第1段落で、まず「ここに正式に西脇順三郎博士を1957年ノーベル文学賞候補者として推薦します」との文章で始め、西脇の紹介として「中心的な詩人・文芸批評家、ゲルマン語研究者、東京の慶應義塾大学英文学・言語学教授、日本学術会議会員」としている。「我が文壇での地位から、彼〔西脇〕がこの申請に最も適格であると確信します」としたうえで、それは本書簡添付の文書から明確にわかるだろうとする。また、後日、文書をさらに送付する予定であることも記している。

第2段落では、「西脇順三郎博士が、現代ヨーロッパ文学を日本に紹介するうえで多大な尽力をしてくれました」と指摘した後、詩人T・S・エリオット<sup>14)</sup>との関連に触れている。すなわち、「彼〔西脇〕はT・S・エリオットと同時代人です。彼〔西脇〕の詩、「A Kensington Idyll〔ケンジントン牧歌〕」は『チャップ・ブック』(第39号、1924年)に掲載されていますが、同号にはT・S・エリオットの「ドリスの夢」も発表されています」と説明している。これに続き、同推薦状は、「エズラ・パウンド氏が1957年8月21日付け書簡で『西脇順三郎の作品をスウェーデン・アカデミーの目に留めさせるように』最近助言しました」と指摘している。

以上のように、辻直四郎教授は、T・S・エリオットを引き合いに出し、詩人としての西脇に触れ、アメリカの詩人、エズラ・パウンドの支持があることも紹介している。全体的に簡潔すぎ



る推薦状との印象を与えるものであるが、詳細は、同推薦状あるいは別便にて添付する資料を見てほしいとのことであろう。いかなる資料が送付されたか、その内訳はこの推薦状には明記されていない。

また、辻は、1957年のノーベル文学賞への推薦を想定しているが、同年の締め切りは同年1月末の段階で終わっていた。10月はこの年の選考が終わり、授賞者発表の時期であった。そのため、同推薦状は、自動的に翌年の推薦として処理されることになった。

辻は、1957年10月5日付の推薦状を发出した直後の同月11日にも、2通目の推薦状をスウェーデン・アカデミーのノーベル賞委員会宛に出している<sup>15)</sup>。これは、推薦にあたり電報、書簡をいつ出したかを確認したものである。それによれば、10月6日に西脇を推薦する電報、7日に必要文書とともに正式な推薦状（上記の推薦状と考えられる）、8日に参照のためのさらなる文書、9日には比較的最近に出版された西脇の詩集3冊（具体名はなし）を辻は送付したのである。

さらにこの10月11日の推薦状では、辻は自身の推薦資格に関して、「東京大学サンスクリット文学・言語学教授、日本学士院会員」であると述べ、有資格者であることを強調している。

以上のように、関連資料として、辻はスウェーデン・アカデミーに西脇の作品を送付していたことがわかる。これは、筆者が西脇の著作の外国語への翻訳状況、スウェーデン・アカデミー・ノーベル図書館の所蔵状況を調査した結果とも符合する<sup>16)</sup>。推薦状の出された1957年までの西脇の著作のうち、スウェーデン・アカデミー・ノーベル図書館には*Spectrum* (London: The Cayme Press, 1924)、『あんどろめだ』（東京・トリトン社、1955年）、“January in Kyoto,” *Japan Quarterly*, Vol.3, No.1, January-March 1956、『第三の神話』（東京・東京創元社、1956年）が所蔵されている。これらは、辻が送付したと考えられる。

1958年のノーベル文学賞選考では、西脇が選ばれることはなかった。スウェーデン・アカデミーの側の対応は、第2章でまとめて考察する。

1959年の選考に対しては、西脇は推薦されていない。1960年の選考以降は、連続して推薦されたことを考えると、奇異な印象を受ける。1959年のみ推薦されなかった事情は不明である。

### (3) 1960年

次の推薦は、1960年であった。1960年の推薦者も辻直四郎東京大学教授であった。この年の推薦状は、1959年9月18日付けのスウェーデン・アカデミー会長宛のものである<sup>17)</sup>。辻の署名下にある肩書は「東京大学サンスクリット文学教授、日本学士院会員、パリ・アジア協会名誉会員 (Membre d'honneur de la Société Asiatique, Paris)」と記されている。本文は1段落の極めて短いものであるが、フランス語の作家紹介本にある西脇の項目、1957年8月21日付けの岩崎良三宛エズラ・パウンド書簡の写しが資料として添付されている。

まず推薦状の本文では、「謹んで西脇順三郎博士をノーベル文学賞候補者として推薦いたします。同氏は、最も影響力のある日本の詩人であり、詩人のエズラ・パウンド氏が『西脇順三郎の

作品をスウェーデン・アカデミーの目に留めさせるように』と助言したように、この申請に最も適格であります」と、辻は述べている。

この推薦状には追伸として、「過去数年間、私はノーベル図書館に時折西脇順三郎に関する本、文書を送付してきました」と記されている。ノーベル図書館には西脇の著作が英語版のみならず、邦語版もあることはすでに指摘したが、辻が送付していたことがわかる。

推薦状には資料2点が付けられている。まずフランス語で書かれたレーモン・クノー編『著名な作家たち』第3巻から西脇の項目を引用している<sup>18)</sup>。

西脇順三郎

(1894年生まれ)

シュールレアリスムの詩人。オックスフォードで学んだ後、慶應義塾大学で英文学を教えている。2冊の詩のアンソロジー、『Ambarvalia』と『旅人かへらず』の他、ヨーロッパ文学に関する多数のエッセイを書いた。」

(Raymond Queneau (ed.): *Les Ecrivains Célèbres*, Tom. III. Lucien Mazenod, Paris, 1953.)

もう1つの資料は、1957年8月21日付けの岩崎良三宛エズラ・パウンド書簡である<sup>19)</sup>。この書簡は、西脇周辺の関係者が西脇をノーベル文学賞に推薦するきっかけになったと考えられるものである。書簡自体は、極めて短い。差出人のパウンドは、当時アメリカで病院に軟禁されており、書簡の差出地もアメリカである。宛名にある岩崎良三(1908-1976年)は西脇の弟子であり、英文学を専門とする慶應義塾大学教授である。

書簡において、エズラ・パウンドは、「いかなる文学賞も審査員賞も子音の重さ、あるいは母音の長さを変えることはできませんが、実際にはもし日本のアカデミーか権威ある団体のようなものがあるのであれば、西脇順三郎の作品をスウェーデン・アカデミーの目に留めさせても差し支えはないでしょう。彼らはまだ日本に栄誉を与えていなかったと思います」と記している<sup>20)</sup>。

岩崎は、パウンドの書簡について後にその経緯を紹介している。それによれば、1956年にパウンドの詩集を翻訳した縁があり<sup>21)</sup>、パウンドにその翻訳書とともに西脇の作品(前述の“January in Kyoto”など)も送ったところ、彼から西脇の詩を絶賛する返事が来て、その後、イタリア語版などの話が進んだ。さらに、上記のパウンドの書簡について、岩崎は以下のように説明している。

「五七年八月二日付でパウンドは先生を日本人がまだ受けていないノーベル文学賞の受賞者に推薦したらどうかと私にいつてきた。そこで早速パウンドにその推薦者になっていただけないかとお願いをしたが、自分にはその資格がないから日本のアカデミーかその他適当な機関を通じて推薦するがよいと答えてきた。間もなく当時ノーベル賞選衡委員の一人であったハマージュ<sup>ママ</sup>ルド国連事務総長から私に先生の業績を詳しく教えてくれという来信があった。」<sup>22)</sup>

岩崎のこの説明のように、西脇をノーベル文学賞に推薦するきっかけとしてパウンドの助言が大きかったことがわかる。パウンドが西脇を高く評価し、ノーベル文学賞推薦につながったことは、その後、西脇周辺の関係者の間では広く共有された出来事となった<sup>23)</sup>。しかし、パウンドが西脇の詩“January in Kyoto” 1 篇を読み、西脇の詩作をどの程度理解できたのか、またなぜノーベル文学賞推薦を提案したのかを批判的に検討し、「神話」の存在を見出す研究者もいる<sup>24)</sup>。

なお、パウンドが指摘するように、詩人にはノーベル文学賞の推薦資格はないため、岩崎ら西脇周辺の関係者は日本学士院会員で東京大学教授の辻直四郎を推薦者としたのであろう。また、ハマースホルド国連事務総長からの依頼については、スウェーデン・アカデミーの資料からは確認できない。しかし、スウェーデン・アカデミーが日本人候補者の経歴、業績などについて情報を持ち合わせておらず、情報収集に苦労していたことを考えると、依頼があっても不思議なことではない。国連事務総長のハマースホルドは、当時スウェーデン・アカデミーの会員（在任1954-1961年、席番号17）であり<sup>25)</sup>、まさにノーベル文学賞を選考する立場にあった。

以上のように、1960年の推薦状は短いものではあるが、資料が添付され、西脇についてより具体的な情報をスウェーデン・アカデミーに提供していたのである。

#### (4) 1962年

1961年の選考に西脇は「日本作家協会」から推薦されたとスウェーデン・アカデミーの文書に記録が残るが、その裏付けとなる史料はスウェーデン・アカデミーで見つかっていない。そのため、ここでは内容についての説明を省く。

1962年の選考に関しては、西脇の推薦状はスウェーデン・アカデミーに残っている。推薦状は、以前のもと同様に辻直四郎が1962年1月17日付けでノーベル賞委員会事務局長のヴィレシュ博士宛に出したものである<sup>26)</sup>。この時の辻の肩書は、「日本学士院会員、東京大学名誉教授、東アジア文化研究センター所長」<sup>27)</sup>である。宛名がスウェーデン・アカデミーの事務局長ヴィレシュになっており、これまでの「スウェーデン・アカデミー、ノーベル賞委員会」、「スウェーデン・アカデミー会長」という組織宛のものと異なり、個人名になっている。1958年選考への推薦以来、辻は継続的に推薦を行い、スウェーデン・アカデミーとやり取りをする中で、事務局長ヴィレシュと接点ができただけであろう。また、推薦状の発出時期も、1958年、1960年の時とは異なり、1月中旬となり、1月末の推薦締め切りを意識した時期になっている。これも、スウェーデン・アカデミーとのやり取りの中で、正確な締め切り日を知った結果であろう。

1962年の推薦状の本文は、3段落からなるものである。内容的にはこれまでの推薦状を繰り返したものであり、新鮮味は欠けるが、推薦状としての体裁は整っている。まず、辻は、「西脇順三郎博士を1962年ノーベル文学賞候補者として推薦することを大変光栄に思っております」との文章で始めている。次に、西脇の紹介に入り、西脇は「現在、日本で中心的な詩人であり、

日本語のみならず英語でも執筆する詩人としての彼の文学キャリア、さらに卓越した創造的活動とパワーにより、彼が少なくとも我々詩人の間でこの榮譽に最も適格な志願者であることを私は常に確信します。詩人のエズラ・パウンド氏の書簡（同書簡のコピーは、私がノーベル図書館にすでに送付した文書の中に見出すことができます）が極めて心強い証言をしている通りであり、『日本に敬意を表して、……西脇順三郎の作品をスウェーデン・アカデミーの目に留めさせるように』我々に助言しています」と続いている。

辻は、最後に過去数年間にわたり西脇を推薦してきたこと、また時折著作や文書を送付したことを付け加えて、推薦状を結んでいる。

以上のように、1962年の推薦状は、内容的には目新しいことはないものの、推薦状の形としてはより整ったものになっている。しかし、この年も西脇がノーベル賞に選ばれることはなかった。

#### (5) 1963年

1963年にも辻直四郎が西脇をノーベル文学賞に推薦している。この年は、1962年12月20日付けで2通の推薦状が出されている。1通目は、スウェーデン・アカデミー、ノーベル委員会事務局局長宛のものである。辻の肩書は、「日本学士院事務局長、東アジア文化研究センター所長、東京大学サンスクリット文学・言語学名誉教授」とされている<sup>28)</sup>。2通目は、スウェーデン・アカデミー、ノーベル委員会、ヴィレシュ博士宛のものであり、末尾には辻の署名があるだけである<sup>29)</sup>。前述のように、スウェーデン・アカデミーの記録では、同年の推薦者は「日本学士院」とされているが、正確には辻直四郎が提出したものであることが推薦状から判断できる。辻の肩書、推薦状用紙のレターヘッドから、日本学士院と記録されたのであろう。

まずスウェーデン・アカデミー、ノーベル委員会事務局局長宛の書簡であるが、これは1962年の推薦状とほぼ同一のものである。第1段落で西脇を1963年のノーベル文学賞候補者に推薦することに関して、冒頭に「この申請書により」の文言が追加され、語順が若干変更されただけである。第2段落、第3段落は、1962年の推薦状と同一である。内容については、上記の1962年の説明を参照されたい。

もう1通のスウェーデン・アカデミー、ノーベル委員会、ヴィレシュ博士宛の推薦状は、大変短いものである。本文は1段落、英文5行にすぎない。すなわち、「私はノーベル文学賞候補者として1963年には西脇順三郎を再度推薦したいと存じます。正式な申請書を送ります。どうかこれに留意して下されば大変幸甚です。もし何かさらに送付するものがあれば、お知らせ下さい」と、辻は記している。

1963年の選考に対して、辻は2通の推薦状をスウェーデン・アカデミーに出し、西脇を推薦したことを強くアピールしているものの、内容的には1962年とほぼ同一であり、目新しさはなかった。送付時期は、締め切りまで余裕をもったものである。連続してノーベル文学賞の推薦を

行ってきたことで、辻は推薦の手続きに慣れてきたのであろう。

#### (6) 1964年

1964年の選考に対しても、辻直四郎が1963年12月16日付けで推薦状をスウェーデン・アカデミー、ノーベル委員会事務局長宛に提出している<sup>30)</sup>。辻の肩書は前年と同じく、「日本学士院事務局長、東アジア文化研究センター所長、東京大学サンスクリット文学・言語学名誉教授」とされている。

推薦状は3つの段落からなる。内容に関しては、1963年のスウェーデン・アカデミー、ノーベル委員会事務局長宛の推薦状とほぼ同一である。違いは、第1段落で、西脇順三郎を1964年のノーベル文学賞候補者として推薦するという部分の文言が若干修正されただけである。すなわち、1963年の推薦状で追加された「この申請書により」が削除され、「私は西脇順三郎氏を1964年ノーベル文学賞候補者として再度推薦申し上げます」となっている。第2段落、第3段落の文言は、前年の推薦状と同一である。

以上のように、1962年以降、辻の推薦状に新しいことが追加されることがなくなり、スウェーデン・アカデミーにインパクトを与えるものではなくなってきたと考えられる。

#### (7) 1965年

1965年の推薦状は、辻直四郎により1965年1月20日付けでスウェーデン・アカデミー、ノーベル委員会事務局長宛に出されている<sup>31)</sup>。辻の肩書は、「東京大学サンスクリット文学名誉教授、日本学士院事務局長」である。

推薦状の本文は、前年までとは異なるものになっている。本文は、1段落、英文7行である。辻は、「西脇順三郎博士を1965年ノーベル文学賞候補者として再度推薦することを大変光栄に思っております」とまず述べた後、西脇を「創造的パワーをもつ最も影響力のある中心的な詩人であり、そのキャリアと文学活動と貢献を私がすでに時折送付した文書で見てほしいと願っています。また、彼が日本でその榮譽に最もふさわしいと理解されるよう、切に願っています」と続けて、終わっている。

以上のように、推薦状としては短いものの、前年までの推薦状を圧縮したような内容になっている。そのため、特に目新しいものがあるわけではなく、スウェーデン・アカデミーの注目を浴びるものではなかったといえよう。

#### (8) 1966年

1966年の選考に対しても、辻直四郎から1966年1月11日付けでスウェーデン・アカデミー、ノーベル委員会事務局長宛に推薦状が出されている<sup>32)</sup>。辻の肩書は、「東京大学サンスクリット文学名誉教授、日本学士院事務局長」である。

この推薦状は1段落の短いものであり、内容的には1965年の推薦状と同一である。冒頭にある推薦の年号が「1966年」に変更されただけである。そのため、内容を細かく紹介することはしない。

以上、スウェーデン・アカデミーで確認できた西脇の推薦状を検討してきた。辻直四郎東京大学教授（途中から名誉教授）が継続して推薦してきたことがわかる。内容、分量から判断して、1958年、1960年、1962年の推薦では、充実した推薦状が作成され、1963年以降はそれを焼き直したものが提出されてきた。西脇について新しい情報が盛り込まれることもなくなった。毎年、辻が推薦を行っても、結果が出ない中で、徐々に徒労感が出てきたのかもしれない。西脇の著作が継続的にスウェーデン・アカデミーのノーベル図書館に送られていたことは、同図書館の所蔵状況から推察できるが、日本語が中心であった<sup>33)</sup>。そのため、スウェーデン・アカデミー側は、その著作から西脇の創作活動の展開を読み取ることはできなかつたであろう。

## 2 西脇順三郎に対するスウェーデン・アカデミーの評価

### (1) スウェーデン・アカデミー内の選考

スウェーデン・アカデミーにおける選考の流れは以下の通りである。西脇の時代も現在も基本的な流れは変わらない。ノーベル財団の説明に若干の情報を追加して当時の流れを紹介すれば、以下の通りである<sup>34)</sup>。

1月末の締め切りでスウェーデン・アカデミーが受理した推薦状の候補者は、2月以降、スウェーデン・アカデミー内に設置されたノーベル委員会（会員5名程度で構成）により推薦者の資格などが審査され、リスト化される。スウェーデン・アカデミーの承認を得た後、ノーベル委員会は候補者の分析を行い、絞り込みを行う。その際、会員のほか、候補者について精通する各国の専門家に分析を依頼し、報告書を求めることもある。5月には候補者は5名程度の最終候補者に絞り込まれる。その後、夏休み中に他の会員もその候補者の作品を読み込むことになる。9月の段階で、ノーベル委員会は候補者についての詳細な分析と順位付けしたリストを含む報告書をスウェーデン・アカデミーの会員に提出する。10月初め、会員はその報告書をたたき台にして議論を行い、最終的に授賞者を投票で決定する。ノーベル委員会による候補者の順位付けがそのまま採用される場合もあれば、異なる結果となる場合もある。

西脇はスウェーデン・アカデミーにおいていかなる評価を下されたのであろうか、スウェーデン・アカデミーの選考史料に基づきその流れを追ってみよう。

### (2) 1958年

1958年の選考には、41名の候補者が推薦された。その中には西脇のほか、日本の谷崎潤一郎

も含まれていた。同年9月25日付け決定のノーベル委員会報告書は、各候補者についても若干の紹介がなされているが、西脇についてはわずか2行の簡単な言及があるにすぎない。谷崎については、14行に及ぶ言及がある。

西脇については、「11) 西脇順三郎。利用可能な翻訳資料が欠けており、この日本人の提案は保留にせざるを得なかった」<sup>35)</sup>とされ、選考の審査対象にならなかったことがわかる。辻が推薦状とともに邦語の文献資料を送付していたが、不十分であった。スウェーデン・アカデミー会員が対応可能な英語などの外国語に翻訳された作品が必要であったのである。

1958年の授賞者は、ノーベル委員会報告書において順位付け第1位であったパステルナーク(ソ連)に決まった。

### (3) 1960年

1960年の選考では、58名の候補者が推薦されていた。日本からは、1958年と同様、西脇と谷崎が推薦された。同年9月23日付け決定のノーベル委員会報告書では、谷崎が最終候補者6名のうちの一人に選ばれたが、評価自体は高くなかった<sup>36)</sup>。

西脇については、以下のような指摘が報告書でなされている。

「57) 西脇順三郎。提案された候補者は現在66歳の日本の抒情詩人であり、同国のモダニズム志向の作詩の中で主導的役割を果たしている。十分な翻訳資料、同様の評価材料に欠けているため、本委員会は残念ながらその提案を保留にせざるを得なかった。」<sup>37)</sup>

以上のように、1960年も翻訳資料など、判断材料に欠けるため、西脇はスウェーデン・アカデミーで十分な審査対象とされなかった。1958年と状況は変わらなかったのである。

しかし、細かく見ると、若干の進展は見られた。同年の選考において、スウェーデン・アカデミーのヴィレシュ書記(事務局長)は同年3月、松井明在スウェーデン日本大使に谷崎と西脇「両者についての検討(Comparing Analysis)とその著書」を送付するよう、依頼している。外務省本省は、両者の詳細な履歴書、作品リスト、著書を松井大使経由でスウェーデン・アカデミーに送付している<sup>38)</sup>。これを受け取ったヴィレシュは、「西脇順三郎(1960年)」という報告書(英文2頁)を作成している<sup>39)</sup>。簡単な評伝と作品紹介がある。この報告書の1頁下には「ノーベル委員会の要請により、日本大使館の裁量に任されたもの」との註が付けられていることからわかるように、これは日本外務省が用意した資料をそのまま転載したものである。そのため、同報告書は、候補者の経歴と作品リストをまとめているにすぎず、作品の分析など、内容に踏み込んだものではない。作品自体の翻訳もなかった。そのため、スウェーデン・アカデミーとしてはこの報告書に基づいて評価はできなかったと考えられる。

#### (4) 1961年

1961年の選考には、56名の候補者が推薦された。日本からは、谷崎、西脇に加えて、川端も推薦された。同年9月18日付け決定のスウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会の報告書は、日本人候補者を最終候補者に選ぶことはなかった。同報告書中の各候補者に関する評価では、谷崎と西脇が同じ項目で紹介されている。それによれば、

「55) 西脇順三郎と56) 谷崎潤一郎。これら日本人の提案に関する問題では、部分的には情報が不十分であるため、本委員会は依然として静観しなければならなかった。両候補者について判断ができるとしても、どちらも検討に値するとは明らかにいえないであろう。」<sup>40)</sup>

このように、西脇について依然として情報不足が続いており、評価の対象とすることはできなかったのである。この年に日本人候補者について報告書が作成されることはなかった。

#### (5) 1962年

1962年の選考には、66名の候補者があり、日本人は前年と同様に谷崎、西脇、川端の3名であった。3名とも、ノーベル委員会の最終候補者とされることはなかった。

ノーベル委員会報告書は1962年9月13日付けで決定されている。各候補者に対する簡単な評価において、西脇に関して重要な指摘が見られる。原文で3行の短いものである。

「37. 西脇順三郎。ヒベット教授からの間違いなく不十分な報告書により明らかになったのは、モダニスト・グループにおける日本人抒情詩人としての候補者の貢献は、賞の評価でのより高い要求を満たしているのみならずとみなすことはできないということである。」<sup>41)</sup>

このように、西脇について否定的な評価がなされたのである。この評価の根拠になったのは、スウェーデン・アカデミーの専門家報告書「谷崎潤一郎、川端康成、西脇順三郎 (1962)」である<sup>42)</sup>。これは、ハワード・S・ヒベット・ハーバード大学准教授(日本文学)による1962年3月7日付けのヴィレシュ宛書簡をそのまま再録したものである。スウェーデン・アカデミーのヴィレシュが同年2月13日付け書簡でヒベットに日本人候補者に関して比較の小論を求めたことに対して、ヒベットが回答したのである。同報告書は谷崎、川端、西脇について個々に分析を加えている。西脇については、短いながらも極めて率直な指摘がなされている。

「とても率直に言えば、谷崎、川端の名前と並んで西脇順三郎の名前を見つけて私はかなり驚いている。西脇氏は、英文学の優れた研究者であり、『荒地』の翻訳で有名であり、さらに漠然とした『モダニスト』のスタイルで執筆する中心的な現代詩人の一人である。しかし、私には彼の



詩は独創性に欠け、退屈に感じる。詩人として、彼はたとえば萩原朔太郎（1942年死去）よりも創造性の点でずっと低い順位にあるように私には思える。また、より検討に値するような20世紀の日本人詩人は他に多数いる一たとえば、田中冬二。」<sup>43)</sup>

以上のように、ヒベットは西脇を谷崎、川端と同列に扱うことに違和感を表明し、詩の世界においても西脇よりも萩原朔太郎、田中冬二<sup>44)</sup>を高く評価していたのである。この短い分析を受けたスウェーデン・アカデミー側は、西脇についてかなり否定的な見解をもち始め、それがノーベル委員会報告書に反映されたと考えられる。

## (6) 1963年

1963年の選考には、80名の候補者が推薦された。日本人候補者には、これまでの谷崎、西脇、川端に加えて、三島も含まれる。特に、三島は1963年9月19日決定のノーベル委員会報告書<sup>45)</sup>において6名の最終候補者の一人に選ばれている。しかし、さらに絞り込まれた候補者3名には入らなかった。

ノーベル委員会報告書の個々の候補者に関する分析で、西脇について原文でわずか2行の評価がなされている。すなわち、「53。西脇順三郎。提案は、当該問題におけるキーン教授の意見に照らして却下される」と記されている<sup>46)</sup>。

ここに登場するキーン教授の意見とは、スウェーデン・アカデミーの専門家報告書「川端康成、三島由紀夫、西脇順三郎、谷崎潤一郎」（1963年）のことである<sup>47)</sup>。これは、コロンビア大学教授のドナルド・キーンによるノーベル委員会書記（事務局長）宛、1963年3月15日付けの書簡を抜粋したものである。前年のヒベット・ハーバード大学准教授の書簡に基づく報告書と同様に、日本文学専門家のキーン教授にも日本人候補者4名について分析が依頼された結果であろう。

キーンは、西脇について以下の通り評価を行っている。谷崎、川端、三島に比べると、記述の分量が少ない。内容的にも西脇に対して極めて厳しいものとなっている。

「西脇順三郎は、他の3名の作家たちとは決して同クラスにはない。彼の名前が含まれていることに私は驚いている。彼は現代日本の著名詩人であるとさえ思えない。たとえ彼がそうであるとしても、日本の詩の現状は日本のフィクションのそれと比べても、強い印象を与えるものである。」<sup>48)</sup>

以上のように、キーン教授は、西脇に関して否定的な見解をスウェーデン・アカデミーに伝えたのであるが、その評価のポイントは前年のヒベット准教授と同様であった。つまり、他の日本人候補者である谷崎、川端、三島と比べると、西脇は見劣りがすることをはっきりと伝えたのである。日本文学の専門家2名が連続して下したこの見方は、後述のようにその後のスウェーデン・

アカデミーの選考において大きな意味をもつことになった。これ以後も西脇は毎年推薦されたが、日本人候補者の選考は、実際には西脇抜きに進むことになったのである。

ヒベットもキーンも日本文学の研究者ではあるものの、詩歌の専門家ではない。二人は、当時、主に日本人作家の小説などを精力的に翻訳していた。特に、キーンは候補者となった作家たちとも面識があり、文学界の最新の動向についても熟知していた。その点で、小説家への評価が高く、詩人の西脇には不利であったともいえよう。キーンらの見方を打ち消すだけの作品の翻訳など判断材料もない状況では、スウェーデン・アカデミーでこうした評価が定着することになった。

### (7) 1964年

1964年の選考には、76名の候補者が推薦された。日本人は、前年と同じく谷崎、西脇、川端、三島の4名であった。1964年9月17日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、谷崎が最終候補者6名の一人に選ばれている<sup>49)</sup>。しかし、谷崎はさらに絞り込まれた候補者2名には入れなかった。授賞者にはフランスの哲学者、作家のサルトルが選ばれた(サルトルは賞を辞退)。

同年のノーベル委員会報告書において、個々の候補者に対する評価で西脇は原文でわずか1行触れられただけであった。すなわち、「53. 西脇順三郎。提案は昨年却下された」と記されたのである<sup>50)</sup>。

これに見られるように、西脇はスウェーデン・アカデミーにおいてノーベル文学賞候補者として検討対象から脱落したと考えられる。1963年の評価がターニングポイントになったのである。

1964年には、ヒベットが新たな専門家報告書「川端康成、三島由紀夫、西脇順三郎、谷崎潤一郎」(1964年)をスウェーデン・アカデミーに提出している<sup>51)</sup>。この時の肩書は、日本文学教授となっている。この報告書は、スウェーデン・アカデミーからの1964年4月15日付け依頼に対する回答と考えられる。日本への研究休暇の準備のため、十分な時間が取れない中、「個人的意見の表明」として提出されたものである。ヒベットは、1962年3月7日付けで三島以外の候補者について短い比較をすでに書いたことに触れた後、西脇については以下のように指摘している。

「その時にも述べたように、私には西脇氏の詩はかなり退屈に感じる。その独創性に欠ける性質は、西洋文学の研究と翻訳に多くの(ほとんどではないにしても)エネルギーを捧げてきた現代日本の作家たちの著作に極めて頻繁に見出せるように私には思える。」<sup>52)</sup>

このヒベットのコメントも、西脇への低評価を補強する材料になったと考えられる。ヒベットは、「西洋文学の研究と翻訳」ではない刺激的な文学を日本人候補者に求めていたと考えられる。

## (8) 1965年

1965年の選考には、90名の候補者が推薦された。日本人は、前年と同じく谷崎、西脇、川端、三島の4名であった。1965年9月9日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、4人とも最終候補者7名には選ばれなかった<sup>53)</sup>。ノーベル委員会は最終候補者からさらに絞り込み、第1位をショーロホフ(ソ連)としたが、同候補者がそのまま同年の授賞者に選ばれている。

ノーベル委員会報告書における西脇の評価は、これまでと同様に否定的であったが、若干新しい動きもあった。同報告書は、「59. 西脇順三郎。本委員会は、ローンストレーム博士の調査からの否定的な印象に留意し、この日本人候補者を却下する」と記している<sup>54)</sup>。

ここで登場するローンストレーム博士の調査とは、当時日本に滞在していたスウェーデン人、ローンストレーム<sup>55)</sup>が1965年8月8日付けでまとめたものであり、スウェーデン・アカデミーの専門家報告書として選考材料に利用された<sup>56)</sup>。

ローンストレームの報告書は、「メモ」と題する15頁のものである。前半7頁が川端、三島、西脇、谷崎について日本で調査した結果をまとめ、後半8頁は4名の作品リストである。これは、スウェーデン・アカデミーがノーベル文学賞候補者4名の関係に対する日本人の見解、さらにそのうちの1名あるいは2名に賞が与えられた時に考えられる反応をローンストレームに調査するよう依頼したものである。ローンストレームは日本で10数人の様々な日本人にインタビューをしている(使用言語は、英語、ドイツ語、日本語)。4名の大学教授(日本の現代文学、古典文学、ゲルマン語)、2名の図書館司書(国会図書館、東京の人文系図書館。後者は女性)、文学に関心のある銀行員、日本ラジオ(Japans Radio)の女性ジャーナリスト、文化・文学に関心のある主婦、その他の人たちである<sup>57)</sup>。各人を特定する氏名等は使われず、アルファベットのAからJの記号が割り振られている。なお、谷崎は1965年7月30日に亡くなっているが、インタビューはそれ以前に行われたため、谷崎も候補者として登場しているとの断りもある。

個別にインタビュー内容が整理されているが、そこに登場する候補者は谷崎、川端が中心であり、三島、西脇について言及は少ない。西脇と三島については、ともに日本人から見て賞に該当しないとしており、西脇については作品がかなり少なく、より広い層から読まれていないことが指摘されている。インタビューをした「その他の人たち」の中には、西脇の名前を聞いたこともない人が複数いたことも記している<sup>58)</sup>。

インタビューを受けた者のうち、国会図書館の司書は、大学で西脇が文学史の教師であったと述べ、人間として、教師として、詩人として西脇を高く評価したが、作品という点では川端、谷崎の作品と比較できないと述べている。また、同氏は、ノーベル賞に関しては現代日本文学の長老としての谷崎を避けることは困難であろうとの見解もローンストレームに伝えている<sup>59)</sup>。

こうしたインタビューを通じて、ローンストレームが出した結論は、以下の4点である。(1) 数年来、日本人作家へのノーベル賞が強く望まれていること、(2) 川端と谷崎のみが真剣に検討しうること、(3) 川端と谷崎のどちらが最もふさわしいかは、個人の好みで異なること、(4)

川端と谷崎の両方に授与することが日本にとって「極めて幸福な解決策」になることが指摘されている<sup>60)</sup>。

このローンストレームの報告書は、スウェーデン・アカデミーの要請でスウェーデン人が実際に日本で調査した結果であり、日本人候補者について極めて詳細な情報を提供している。西脇については、完全に候補者として除外されることになったと考えられる。また、日本人候補者のうち、初の受賞者は谷崎、川端に絞られ、谷崎の死去により川端が残る流れを作るきっかけになったのではないかと推察される。

### (9) 1966年

1966年の選考には、72名の候補者が推薦された。日本人は、西脇、川端の2名であった。三島は推薦されていない。1966年9月15日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、川端は6名の最終候補者の一人に選ばれ、さらに川端は最後の候補者5名のうち第1位となっている<sup>61)</sup>。このノーベル委員会の報告書がアカデミー会員の審議に回されたが、同年の授賞者にはノーベル委員会の最終順位第2位のS・J・アグノンとネリー・ザクスの2名が選ばれている。

西脇については、「49. 西脇順三郎。提案は受け取った専門家報告書に照らして却下される」と1行あるだけである<sup>62)</sup>。ここでいう専門家報告書とは、前年のローンストレームの報告書と考えられる。西脇の推薦は完全に審査対象外となったことがわかる。

### (10) 1967年

1967年の選考には、70名の候補者がいた。日本人は、西脇、川端、三島の3名が推薦されている。1967年9月14日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、川端と三島が7名の最終候補者に選ばれ、さらに川端は最後の候補者4名の一人となっている。この年は、ノーベル委員会の意見が割れ、3つの案があったが、どの案にも川端の名前は入っていた。エステルリング委員長の案では3名中の第2位となっている<sup>63)</sup>。同年の授賞者には、ノーベル委員会の他の委員が推していたアストウリアス（グアテマラ）が選ばれている。

西脇については「46. 西脇順三郎。提案は以前に却下された」とだけ書かれ、素っ気ないものであった<sup>64)</sup>。

### (11) 1968年

1968年の選考には、83名の候補者がいた。日本人は、前年と同様に西脇、川端、三島の3名が推薦されている。1968年9月12日付けで決定されたノーベル委員会報告書によれば、川端が4名の最終候補者の一人に選ばれている。この4名の順位付けでノーベル委員会委員の意見は、割れている。第1位をフランスのマルローとする案、ベケットとする案の2つである。第2位以下は同じで、第3位に川端が入っている。川端は、1966年以来、3年連続で最終候補者に選出

され、ノーベル委員会委員の順位付けでも上位3位以内に入っていた<sup>65)</sup>。その点では、同年に川端にノーベル文学賞が授与されるが、スウェーデン・アカデミー会員の間に川端に関する理解は深まっており、いつ授賞が決まってもおかしくない状況にあったことがわかる。

本稿の研究対象である西脇について、1968年のノーベル委員会報告書は、「57. 西脇順三郎。この日本人の提案は、以前に却下された」とだけ触れている<sup>66)</sup>。これまでと同様、西脇への評価は、厳しいものであり、西脇は選考対象から完全に除外されていたのである。

## おわりに

以上、ノーベル文学賞候補者、西脇の推薦状況、選考状況を一次資料に基づいて考察した。西脇は、1958年、1960年から1968年までの各年の計10回推薦されていた。スウェーデン・アカデミーで推薦状の原本を確認できたのは、そのうちの7回分であった。どれも東京大学教授（途中から名誉教授）であった辻直四郎が推薦したものである。辻は、西脇を日本の中心的な詩人として高く評価し、毎年のように西脇を推薦し続けた。また、辻は関連資料として西脇の著作をスウェーデン・アカデミーのノーベル図書館に度々送付していた。これは、同図書館が所蔵する西脇の著作から確認できる。

しかし、こうした辻の精力的な推薦運動は実ることはなく、徒労に終わった感がある。それは、単にノーベル文学賞を受賞できなかったというだけでなく、スウェーデン・アカデミー内で極めて厳しい評価しか得られなかったことに象徴的に表れている。1958年から1968年までの間、ノーベル文学賞の日本人候補者として西脇以外に、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫がいた。彼らと比較すると、西脇への低評価は際立つ。西脇は選考レースで早々に脱落したといえよう。

スウェーデン・アカデミーは、当初、西脇について著作の翻訳、関連資料がなく、評価できないという状況にあった。こうした状況を打開したのが、スウェーデン・アカデミーが依頼した専門家報告書であった。日本文学研究者のヒベット（1962年、1964年）、キーン（1963年）の日本人候補者に関する比較分析を通じて、西脇が谷崎、川端、三島と同列にはないことが明らかになった。また、日本で調査を行い、日本人の見解をまとめたスウェーデン人、ローンストレーム（1965年）の分析により、それは再確認される。すなわち、ノーベル文学賞受賞者として最もふさわしいと多くの日本人が考える候補者は谷崎あるいは川端であること、西脇については作品も少なく、知名度もないことが示されたのである。

ノーベル委員会の評価を通して感じられるのは、委員が西脇の著作を読んで評価したとは考えにくいことである。上記の専門家報告書が委員の評価に決定的な意味をもったと考えられる。その原因は、西脇の著作に関して翻訳がほとんどなかったことである。創作活動の最初期の英語本があるほかは、雑誌に掲載された詩、“January in Kyoto”が見られる程度である。これでは、西脇の詩作の全体像をつかむことはできない。辻が西脇の詩集を継続的にスウェーデン・アカデミー

に送付していたが、それは日本語のものである。西脇は1950年代、1960年代に次々に詩集を発表していたが、そうした活動がスウェーデン側に伝わることはなかった。ノーベル文学賞の選考において、評価の前提として翻訳の存在がいかに関重要か、この西脇の事例は教えてくれている。翻訳にも配慮した推薦運動が必要であったのであろう。推薦状の説明だけでは効果は薄かったと言わざるを得ない。

では、西脇の作品について翻訳があれば、スウェーデン・アカデミーは西脇を評価したかと思われるか、そうとも言えない。西脇は欧米のシュールレアリスム、モダニズム運動の影響を受け、詩作を展開したが、そうした傾向は高く評価されなかった可能性がある。実際にヒベットの報告書にあるように、「西洋文学の研究と翻訳」に基づく創作活動は「退屈」と捉えられている。ノーベル文学賞であれば、スウェーデン・アカデミー会員の期待する「日本文学」、「日本文化」があったのかもしれない。

また、1950年代から1960年代に日本人初のノーベル文学賞受賞者を出すにあたり、スウェーデン・アカデミーは候補者の日本での位置づけ、評判に多大な関心を寄せていた。それは、1965年のローンストレームの報告書に顕著である。日本における文学界での評価、さらに一般国民の評価さえ気にしていた。このように、スウェーデン・アカデミーは多くの日本人が納得する受賞者を選ぶことに細心の注意を払っていたと考えられるが、それは日本においてノーベル文学賞の権威を保つために必要と考えられた結果であろう。日本人初の受賞者であるだけにその選考に慎重になったことは十分理解できる。この観点からも、日本人の間で知名度が高くない西脇はスウェーデン・アカデミーの要求を満たす候補者ではなかったと考えられる。

(よしたけ・のぶひこ 高崎経済大学地域政策学部教授)

## 註

- 1) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考 1958～1965年——」『地域政策研究』(高崎経済大学)第22巻第4号、2020年3月。
- 2) 阿部良雄「オックスフォードにて」、安東伸介編『回想の西脇順三郎』(慶應義塾三田文学ライブラリー、1984年)、24頁。
- 3) 海保真夫「西脇先生の思い出」、安東伸介編、前掲『回想の西脇順三郎』、142頁。
- 4) 新倉俊一「晩年の西脇先生と詩人としての遺産」、安東伸介編、前掲『回想の西脇順三郎』、292頁。新倉は、その後、より詳細にノーベル文学賞推薦の経緯を紹介している。新倉俊一『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』(みすず書房、2003年)、157-163頁。同『評伝 西脇順三郎』(慶應義塾大学出版会、2004年)、217-223頁。
- 5) 工藤美代子『寂しい声 西脇順三郎の生涯』(筑摩書房、1994年)、247-259頁。
- 6) エズラ・パウンド(1885-1972年)は、アメリカの詩人である。アメリカ、イギリスなどで活発な創作活動を展開し、第一次世界大戦後はイタリアに定住する。第二次世界大戦中にムッソリーニ政権を支持し、反米放送を行ったため、戦後、逮捕された。精神障害とされ、アメリカで長く病院に軟禁される。1958年に国家反逆罪の訴訟が却下され、娘の住むイタリアに戻った(「関連年譜」、新倉俊一、前掲『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』、296-301頁)。
- 7) 「谷崎 ノーベル賞候補4度」(『読売新聞』2013年1月14日朝刊)。
- 8) 大木ひさよ「川端康成とノーベル文学賞——スウェーデンアカデミー所蔵の選考資料をめぐる——」(『京都語文』(佛教大学国語国文学会)第21号、2014年11月)。
- 9) 辻直四郎(1899-1979年)は、古代インドのサンスクリット語を専門とする東京大学文学部教授であり、定年後は慶應義塾大学教授、東洋文庫理事長などを歴任した。『サンスクリット文学史』(岩波書店、1973年)、『サンスクリット文法』(岩波書店、1974年)、『ヴェーダ学論集』(岩波書店、1977年)、『辻直四郎著作集』全4巻(法蔵館、1981-1982年)などの著作がある。

- 10) ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://www.nobelprize.org/nomination/archive/show.php?id=16828>>、最終閲覧2021年11月19日。
- 11) 1961年の推薦では、谷崎も同様に「日本作家協会」(The Japanese Authors' Union)が推薦したことになる。谷崎の推薦に関する分析の際に触れたが、1961年1月末あるいは2月初めに松井明在スウェーデン日本大使がすでに推薦されていた川端に加えて谷崎、西脇も候補者に追加するよう、スウェーデン・アカデミーに働きかけ、早急に推薦状を手配することを約束していた。その結果、日本外務省の資料によれば、西脇については、辻直四郎・東京大学教授が推薦状を送付したとされている(詳細は、前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考 1958～1965年——」、34頁)。
- 12) ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://www.nobelprize.org/nomination/archive/show.php?id=16887>>、最終閲覧2021年11月19日。
- 13) Letter of recommendation from Naoshiro Tsuji to the Nobel Prize Committee, Swedish Academy, 5 October 1957, Swedish Academy.
- 14) T・S・エリオット(1888-1965年)は、アメリカ生まれのイギリスの詩人、批評家。「荒地」(1924年)などの詩を発表し、1948年にノーベル文学賞を受賞した。
- 15) Letter from Naoshiro Tsuji to the Nobel Prize Committee, Swedish Academy, 11 October 1957, Swedish Academy.
- 16) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究(2・完)——」『地域政策研究』(高崎経済大学)第21巻第4号、2019年3月、21-22頁。
- 17) Letter from Naoshiro Tsuji to Mr. President of the Swedish Academy, 18 September 1959, Swedish Academy.
- 18) *Ibid.*
- 19) *Ibid.*
- 20) *Ibid.* エズラ・パウンドの書簡は、以下の文献に原文が収録されている。Sanehide Kodama ed., *Ezra Pound and Japan: Letters and Essays* (Redding Ridge, CT: Black Swan Books, 1987), p.141. 同書にはその前後の書簡もある。
- 21) 岩崎良三訳註『パウンド詩集』(荒地出版社、1956年)。
- 22) 岩崎良三「伊訳『京都の一月』」『定本 西脇順三郎全集 第11巻月報』(筑摩書房、1973年初掲、1994年再録)、8頁。
- 23) 新倉俊一、前掲『詩人たちの世紀 西脇順三郎とエズラ・パウンド』、157-163頁。同、前掲『評伝 西脇順三郎』、217-223頁。
- 24) 秋草俊一郎『『書き直し』としての自己翻訳——ノーベル文学賞候補西脇順三郎の『神話』』、白百合女子大学 言語・文学研究センター編『芸術におけるリライト』(弘学社、2016年)。
- 25) Bo Svensén, *De Aderton: Svenska Akademiens ledamöter under 225 år* (Stockholm: Svenska Akademien, 2011), s.231. ハマーショルドの父、ヤルマル・ハマーショルド(第一次世界大戦時にスウェーデン首相も務めた政治家)もスウェーデン・アカデミーの会員であり、ハマーショルドは父の死後、それを引き継ぐ形で会員となった。当時、彼は国連事務総長であったが、文学にも造詣が深い人物であった。国連事務総長とスウェーデン・アカデミー会員の在任中であった1961年にアメリカで殉職した。死後、1961年のノーベル平和賞を授与されている。
- 26) Letter from Naoshiro Tsuji to Dr. Willers, Secretary-General, the Nobel Prize Commission, 17 January 1962, Swedish Academy.
- 27) 東アジア文化研究センター所長としたところの原文は、Director of the Centre of East Asian Cultural Studies である。同組織は、東洋文庫内にユネスコの関連で1961年に併設されたセンターであり、2003年に終結した(東洋文庫ホームページ、略史<<https://www.toyo-bunko.or.jp/about/enkaku.html>>、最終閲覧2021年11月19日)。
- 28) Letter from Naoshiro Tsuji to the Secretary-General of the Nobel Commission, the Swedish Academy, 20 December 1962, Swedish Academy.
- 29) Letter from Naoshiro Tsuji to Dr. Willers, the Nobel Prize Commission, Svenska Akademien, 20 December 1962, Swedish Academy.
- 30) Letter from Naoshiro Tsuji to the Secretary-General of the Nobel Commission, the Swedish Academy, 16 December 1963, Swedish Academy.
- 31) Letter from Naoshiro Tsuji to the Secretary-General, the Nobel Commission, the Swedish Academy, 20 January 1965, Swedish Academy.
- 32) Letter from Naoshiro Tsuji to the Secretary-General, the Nobel Commission, the Swedish Academy, 11 January 1966, Swedish Academy.
- 33) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の日本人候補に関する基礎的研究(2・完)——」、21-22頁。
- 34) ノーベル財団ホームページ<<https://www.nobelprize.org/nomination/literature/>>、最終閲覧2021年11月19日。
- 35) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1958 jämt särskilt yttrande, Svenska Akademien, s. 4. 冒頭の番号は候補者リストの番号である(以下同様)。
- 36) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考 1958～1965年——」、42-43頁。
- 37) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1960 jämt särskilda yttranden, Svenska Akademien, s. 8.

## ノーベル賞の国際政治学

- 38) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考 1958～1965年——」、43頁。
- 39) Junzaburo Nishiwaki (1960), Swedish Academy.
- 40) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1961, Svenska Akademien, s. 9.
- 41) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1962, Svenska Akademien, s. 5.
- 42) Junichiro Tanizaki, Yasunari Kawabata, Junzaburo Nishiwaki (1962), Swedish Academy.
- 43) *Ibid.*
- 44) 萩原朔太郎 (1886-1942年) は、前橋市出身の詩人。第1詩集『月に吠える』(1917年)以降、『新しき欲情』(1922年)、『青猫』(1923年)、『純情小曲集』(1925年)、『氷島』(1934年)などを発表。田中冬二 (1894-1980年) は、福島市出身の詩人。第1詩集『青い夜道』(1929年)以降、『海の見える石段』(1930年)、『山嶋』(1935年)、『故園の歌』(1940年)、『山の祭』(1947年)、『晩春の日に』(1961年)など、精力的に創作活動を展開した。
- 45) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1963, Svenska Akademien, s. 10-12.
- 46) *Ibid.*, s. 6.
- 47) Yasunari Kawabata, Yukio Mishima, Junzaburo Nishiwaki, Junichiro Tanizaki (1963), Swedish Academy.
- 48) *Ibid.*
- 49) “Yttrande av Herr Österling.”Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1964, Svenska Akademien, s. 1-3.
- 50) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1964, Svenska Akademien, s. 6.
- 51) Yasunari Kawabata, Yukio Mishima, Junzaburo Nishiwaki, Junichiro Tanizaki (1964), Swedish Academy.
- 52) *Ibid.*
- 53) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1965, Svenska Akademien, s. 10-12.
- 54) *Ibid.*, s. 6.
- 55) ローンスターム (1916-1994年) については、情報がほとんどない。スウェーデン王立図書館の蔵書検索でヒットした少ない文献情報によれば、アーキビストとして活動したと考えられる。
- 56) John Rohnström, “P. M.,” Tokyo, den 8 augusti 1965, Svenska Akademien.
- 57) *Ibid.*, s.1.
- 58) *Ibid.*, s.3.
- 59) *Ibid.*, s.5-6.
- 60) *Ibid.*, s.7.
- 61) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1966, Svenska Akademien, s. 10-12.
- 62) *Ibid.*, s. 7.
- 63) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1967, Svenska Akademien, s. 10-12.
- 64) *Ibid.*, s. 7.
- 65) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobelkommité 1968, Svenska Akademien, s. 1, 9-10.
- 66) *Ibid.*, s. 6.

### 付記

本稿は、2021年度科学研究費補助金(課題番号18K01471)による研究成果の一部である。